小説『満州国演義』に見る中国大陸（船戸与一）

東亜同文書院大学記念センター
ポストドクター　武井義和

船戸与一氏は、現在出版中のシリーズ小説『満州国演義』を執筆する際に、満州国が成立する基軸として考えたという「大アジア主義」について講演を行った。

大アジア主義とは基本的には白色人種に対する抵抗の概念であるものの、どのように抵抗するか、どのようにして大アジア主義を具現化するかについての方法論がなく、また実体がないため、中国の孫文や、インド独立運動に携わったビハリ・ボースなども大アジア主義を標榜することが可能な思想であることを述べた。

特に、大アジア主義は日本だけでなく中国の孫文にもみられたものであるが、それは複雑に交錯していたという点は、講演の中心的な部分である。例えば、日本の中で大アジア主義の国民的共鳴として満州国は建国されるが、建国にあたって満州青年連盟が唱えたスローガン「五族協和」は、かつて孫文が唱えた「五族共和」からとったものであることを指摘した。つまり、日本が満州国の建国を理論付けるのに用いたのが、対立状況に陥ったはずの中国の孫文の発想という、東アジアにおける大アジア主義をめぐる複雑な関係を浮き彫りにした。また、孫文の意識には「漢民族中心主義」があり、満州国を建国した日本の大アジア主義は、同じように日本が盟主になりアジアを引っぱっていくというものであったという、大アジア主義の共通する特徴についても触れた。

最後に、満州国建国後、関東軍は増強されていくが、戦火の拡大とともに軍隊が南方へ転出した結果、1945年のソ連参戦時には関東軍は戦えない状態に陥っていたことに触れ、曖昧な思想である大アジア主義は具体性を帯びてくるとほころびが目立つと述べ、大アジア主義の虚構性についても指摘した。

講演する船戸与一氏

講演を聴く参加者たち